



# IMPACT CREATOR

15 ← → 14



# SATOKO ISHIHARA

命の尊さを伝えたい

石原 慧子

スイッチを切り替えれば、人生は変わる

## 女性経営者に 憧れていた

安城市は愛知県ほぼ中央、西三河地方にあります。人口では8番目の小さな市ですが、トヨタ自動車でおられる豊田市が近いので、自動車関連の製造業が盛んで、世界的なシェアを誇るような大企業の本社も数多くあります。私の祖父が安城市で創業した中央精機株式会社そのひとつで、後のトヨタ自動車の副社長になられた方から「国家のお役に立てることをやらないうか、それは何とんでもないか、それでは何とんでもないか、それでは何とんでもないか」と声をかけていた。創業したそうです。また昭和40年ごろのモーターゼーションの時代、安城市には自動車学校がなかった。祖父は「自分は車の部品を作る仕事をしていながら、いざ乗ってもらう段になると、みんなよその街に免許を取りに行かなくてはならない。安城市にも自動車学校が必要だ。そしたら地域の方に喜んでら

えるだろう」とそんな思いから安城自動車学校（現・コアラドライブ安城）を設立したそうです。

私の父は七人兄弟の末っ子で、祖父からこの安城自動車学校を継ぎました。

小さいころの私は、「協調性のない子」と毎年通知表に書かれるような子でした。特に目立つ存在でもなく、集団が苦手でした。でも、私の両親は「それが私たちの子」と理解して見守ってくれました。

母が難病にかかり、小学5年生から2年間、三重県の里親に預けられました。中学生の時は不登校になり、中学校2・3年とほとんど行けませんでした。進路に悩んでいた時、とある高校の入学案内に女性起業家の卒業生紹介が載っているのを見ました。「自分もこんなふうになりたい。立派な経営者になれば、同じような不登校で人生に希望を見出せない子でも『スイッチを切り替えれば人生は変わる』と思えるんじゃないだろう

石原 慧子

日本で一番安全で事故のないまちを作りたい



石原 慧子  
いしはら さとこ

### 株式会社はちどり コアラドライブ 安城 代表取締役社長

1979年愛知県生まれ。兄と弟の間の一人娘で、小学5年生の時に、母親の難病により三重の里親の家に2年間預けられ育ち、中学2年生で不登校になる。大学卒業後、大手自動車学校での修業を経て祖父が創業した旧・(株)安城自動車学校に入社。評判の悪かった自動車学校のイメージを変えようと、社内改革を始める。30歳で代表取締役役に就任。「日本で一番安全なまちづくり」をビジョンに掲げ、地域の交通安全教室をはじめするなど、地域貢献活動にも積極的に取り組む。交通安全教育は「人の命の尊さと感謝の心を育むこと」に重きを置き、交通事故で亡くなった方の遺品や遺族のメッセージをロビーに展示する「生命のメッセージ展」が評判を呼ぶ。2014年には企業における交通事故削減の社員研修・コンサル事業部「人と安全研究所」を設立する。こうした独自の経営スタイルが注目を浴び、全国から経営者が見学に訪れる自動車学校となる。2015年、優れた経営手腕を発揮するとともに、地域での活動などに積極的に取り組む女性経営者を表彰する「第25回中部経済新聞社中経トバーズ賞」を受賞。

か」と考えるようになりました。猛勉強し高校に進学、大学は経済学部を選びました。そして、大学在学中に自分から父に「会社を継ぎたい」と相談しました。父の回答は「これからの時代、女性が社長をやるのも悪くない。後継者になる者がやりたいと思えることが大切だ」。

こうして私は安城自動車学校の後継者候補となりました。

## 私の使命を 教えてくれた事故

大学卒業後、愛知県のある自動車学校へ修業も兼ねて約2年間勤めました。

そこは自動車教習の教本も出版しているような大きな学校で、全国の自動車学校の後継者が修行に来ていました。教習所指導員の資格を取得し、教習所指導指導、教本の販売営業、現場からオフイスワークまでひととおり経験しました。

実は、研修をはじめたころは自動車学校の仕事が退屈でしやうがありませんでした。面白くない。朝から夕方まで同じことをくり返して、同じ内容をすっ

と教え続けないといけない。私は経営者になって何かをやりたいと思ったのにと、悶々としていました。

そのさなか、突然親しい友人の娘さんが交通事故で亡くなりました。修業1年目の冬です。彼には3人のお子さんがいました。娘さんは家の近所で自転車に乗っていて、交差点を左折する自動車の巻き込み事故で亡くなりました。「こんなに毎日教習で安全運転を教えても、結局事故は起きる。自動車学校に何の意味があるんだろう」と、私は強く憤りました。それでも小さな命が、自動車学校を経営することの責任と重さを、その仕事の価値を私に教えてくれました。

経営者として、指導員としてひとつの命の価値を伝えていく学校作りがしたい。私ははじめてそう思ったのです。

その後、修業が終わって安城自動車学校に入社したものの、それどころの状態ではありませんでした。

## 勝手にはじめた 大改革

当時の安城自動車学校はサービス業とはほど遠い評判の悪い学校でした。移動は車が必須の地域です。高校卒業の前や就職前などに教習所に通うという、運転免許取得率が高い地域ですが、施設は古く、そこかしこにタバコの吸い殻がありました。

卒業時のお客さまアンケートに「タバコくさい」という声が目につき、これはよくないなと思いました。それから今までのアンケートを全部見て悪いところをノートにカテゴリーに分けて書き出していきました。これをひとつずつ変えていこうと。

当時の私は20代半ば、総務の一人で特に役職もないのですが、そんなことは気にしていません。社内の改革に着手します。

まずは「この自動車学校に通ってよかった」とお客さまが喜んでくれる会社にしたかった。お客さまが不満を感じたまま自動車学校を卒業していくことが切ない。社長になるまで待つことはない。

不明確だった喫煙スペースを撤去し、受動喫煙がないよう新たに喫煙所を設けました。喫煙所以外は全面禁煙にし、施設の

改装工事も決めて3か年計画を立てました。設備の壊れ、劣化、暗さ、お手洗い、快適に通っていたために見直すところだけでした。父には「直そうと思っ」ただけ相談し了解を得て「コンセプトを立て、会社のロゴも変えました」。

社人経験もまだ3年ほど。改革するには分からないことだらけでした。「(「コーポレートアイデンティティ」)について勉強をはじめて、本を読み漁る毎日です」。

経営の勉強会にもどんどん参加し、経営者の方々とお話しする機会も積極的に持ちました。また、読んだ本で気になった著者には直接連絡してお話を聞かせてもらいました。

ある経営者が「朝礼が大事」と話してはるのを聞いて、教社の朝礼を見学させていただき、動画を撮って、台本も作って、共感してくれそうな若い社員にサクラをお願いして……。「朝礼を盛り上げよう」と頼み、みんなで集まって前日に練習までもっていました。

教わったことは全部やる、その一心でした。

